

詩「啐啄同時（そったくどうじ）」

子どもが人知れず
自分でもわからないうちに
溜めて 溜めて 溜めて
解放して 解放して 解放して
また
溜めて 溜めて 溜めて
解放して 解放して 解放して
そんな繰り返しの中で
静かに 静かに 成長して
ゆっくり ゆっくり 成長して
その殻を破ろうとする時が訪れる

親はその間
起こして 起こして 引っ張って
怒って 怒って 途方に暮れて
なんで なんでと問い詰めて
待って 待って 待ちきれず
信じて 信じて 信じきれず
諦めて 諦めて 諦めきれず
そんな繰り返しの中で
自分のエゴや思い込み
世間の常識に縛られていたと気がついて
その殻を破ろうとする時が訪れる

「もういいやん」
魔法の言葉はたった6文字
啐啄同時
許した時が許された時
手を離したら
自由に飛べた
縛っていたのは私だった

「啐啄同時（そったくどうじ）」

雛鳥がその殻を破って生まれ出ようとする時、まず最初に雛鳥がコツコツと殻を内側からつつきます。これを「啐（そつ）」と言います。

その音を聞きつけた親鳥が雛を外に出そうと同じ場所を外側からコツコツとつつきます。これを「啄（たく）」と言います。

大切なのは親鳥は決して自分から殻をつつくことはしないということです。必ず雛鳥が殻を内側からつつく音を聞いてからしか「啄」をしません。そして内からコツコツ、外からコツコツと互いにつつき合っているうちに、全く同時につつき合う瞬間が訪れます。その時、殻が敗れて雛はこの世界に生まれ出ることが出来ます。

このことから親の欲や考えで先回りするのではなく、子どもにその準備が出来るまで十分に待って「やりたい」と言い出してから動くようにすれば何事も上手くいくことの例えとして「啐啄同時」は使われます。

子どもにその準備ができて動き始めたらそれに応える、そういう子育てにとっても共感を感じます。子育ては何よりも待つことが大切です。

ただこの詩では、親が自らのエゴや思い込み、常識に捉われた考えという自分の殻を破りその外に出られた時に、子どもも不登校という殻を破り外の世界に出ていけるのだということを表現しました。

子どもに不登校という殻を破って外の世界に出てほしいと願う親の気持ちは理解できません。でもそう願う親の方だって自分のエゴや思い込みや世間の常識に捉われていて「自由に自分らしく生きる」ということが出来ていません。

まあ「自由に自分らしく生きる」で言ったってそんなに簡単に出来るものではありません。それはリスクを伴うものであり、下手をすれば今まで築いてきた社会的信用や安定を失う危険を孕んでいます。

だから多くの人はそんな「自由に自分らしく生きる」なんて夢みたいなことは考えずに生きているのです。そのほうがずっと賢明であり安全なのですから。でもやっぱり自由に自分らしく生きたいという願いは心の底で生き続けているのではないのでしょうか。

それは自分を生きるということ。

その疼きのような願いを持った人のところには神様が一つのプレゼントを贈ってくれます。子どもの不登校というプレゼントです。

その不登校というプレゼントを受け取れた時、それは不登校のその子をそのままを許し受け入れた時、あなたは自由に自分らしく生きられるようになったのです。

啐啄同時。解放は親子同時に訪れる、と僕は考えています。